

Ecola

イ・コ・ラ

No.4

発行 2003年9月7日

こんにちは。あっという間に季節はめぐり、気がつけば、もう秋ですね。みなさん、いかがお過ごしでしたか？今年も思いっきり夏を楽しめましたか？え？長かった夏が終わり、ホッとしている？夏の疲れでぐったりしている？ウーン、実は、編集局も少々・・・。（し、しつれい！ついあくびが・・・）

さて、今回のイコラ、前号からずいぶん期間があいてしまいましたが、さまざまなイベント報告、サポートブックづくりや絵画教室でのとりくみなど、楽しいお話がいっぱいです。 ゆっくり読んで、夏の疲れを癒してください。

ほな、さっそく、いこら！

家族のつどい

2003年2月16日 子どもセンターにて
堂本佳男

今年の親子のつどいは、担当班と事務局と私とで準備をしましたが、あまり打ち合わせができず内容としては、あまり良くなかったかなあ、と思いました。まずは、風船を膨らませ足につけて相手の風船をわるという風船割りゲームでしたが、風船が

なかなか割れず、だんだん白けてしまったのでは・・・。また、子どもたちもどうすればよいかよくわからず楽しめなかったのかなあ、とも思います。2つ目のジャンケンゲームは、少し盛り上がりがあったのではと思います。（大声を出し続けたので疲れしました。）次のビンゴゲームでは、たいへん盛り上がりました。景品もたくさんあったし、皆さんに喜んでもらえたと思うのですが、これも時間がかかり、

盛り上げるため大声でがんばったので疲れしました。

今回の行事は、私たち夫婦で仕切らせてもらったのですが、自分の子どもが放ったらかしくなってしまう、子どもに申し訳ないと思いました。やっぱりもう少し打ち合わせをし、分担を明確にしてやらなければすべてに対して良い行事にならないし、皆さんにも喜んでもらえないと考えます。これから回数を重ねるごとに皆さんに協力していただき良い行事になるようにしていきたいと思います。

最後に、役員さん、担当班のみなさん、ありがとうございました。



療育キャンプ

9月7日・8日

田辺市コガノイベイホテル・紀州路みなべ にて

県支部主催行事「在宅重度障害児集団療育」が行われました。精神科医の宮本聡先生による講演と個別相談あり。また、子どもたちは、プール遊びや乗馬を楽しみました。

参加の方に感想をうかがいました。

「療育キャンプ」に、父、母、亨で参加。精神科の先生の話に始まり、あっという間の2日間。父曰く、「少し中途半端やな。」せっかくドクターと膝つき合わせて話せるなら、もっと具体例やサポートの仕方をディスカッション風にとか、乗馬ならトレーナーをとか、日頃こんな会に出ることの少ない父にはまだまだ時間が足りなかったし、夢はふくらむ限りのよう……。母の目当ての乗馬は、思っていたよりスムーズに亨が受け入れてくれたのでグー。今後さらに充実していく催しであろうから、とりあえず参加できて良かったです。

山下亨の母



ほな、乗ろか。
ウマさん、ちょっとじっとしてな。
よっこらしょっと！

須田初枝先生きたる！

和歌山県主催 自閉症療育セミナー 2月18日 子どもセンターにて

県障害者・子どもセンター主催で毎年開催されるこのセミナーでは、昨年、支部の方へ講師の希望を聞いていただきました。そこで、以前より希望があった(社)自閉症協会の副会長であり、自閉症を育てた母親である須田初枝さんを希望しました。須田さんはまた、埼玉県にある初雁の家の理事長でもあり、初雁の家では、埼玉県自閉症発達障害支援センター「まほろば」が開設されています。(須田さんは数年前の総会時の研修でも来和されています。)

お聞きしたい話は沢山ありますが、今回のセミナー

ではご自分の子育てと初雁の家の取組をお話してくださいました。また、情報交換会では、県北部の養護学校や通園施設の方々の参加があり、主に教育についての話になりました。食事会では、研修後に有志数人で初雁の家を訪問した思い出話、また、年長児者の親の参加者が多かったので青年期の話で盛り上がりました。

今回、須田さんには私達の希望を叶えていただき、夜までのハードスケジュールで大変お疲れになったと思いますが、参加された方々には得るものが多くあったと感じています。

県支部事務局 石橋智恵子

※ 県との対話集会が、今年も3月7日、県こども・障害者センターにて行われました。

サポートブックづくり

2002年9月27日、10月25日の2回にわたって、辻幸代先生のご指導により、サポートブックづくりのための勉強会を行いました。



サポートブックを作ってみて、いかがでしたか？



☆ 改めて子どもの様子を確認できるいい機会になった。

☆ 難しかった。まだ小さいので、もっと大きくなればわかってくるのかな？

☆ 近所の人や知り合いの人にも見せた。



サポートブックを作ろう！

辻 幸代

平成14年9月27日と10月25日に、サポートブックを作ろうという支部の活動があるとうかがい、お手伝いさせていただきました。

サポートブックとは、自閉症という障害のことを知らない人と我が子が関わるときに、親の代わりに付き合うコツを教えてくれる小冊子です。「急にさわると驚いて大声を出してしまいます」「トイレは男便所の場所を教えてあげると一人でできます」「レストランでは窓を背にして席に着くと落ち着いて食べられます。注文は写真付きメニューなら自分で選びますが、注文はしてあげてください」「話しかけるときはウエストポーチの中の写真ブックを指しながら外国人に話しかけるようにわかりやすくゆっくりお願いします」などなど・・・付き合ってくれる人も、もちろん自閉症の人も余計なトラブルやストレスを最小限にして楽しい時間を一緒に過ごすためにサポートブックは使います。

参加して下さった皆さん、いかがだったでしょうか？使ってみてどうだったか、体験談などあれば「いこら」の紙面で聞かせていただけると嬉しいです。

サポートブックは四国のあるお母さんが始められて少しずつ広まってきている物です。早くも和歌山でサポートブックの輪が広がってきていることに頼もしさを感じました。参加できなかった方で興味のある方は前述のお母さんのホームページがありますのでご覧ください。

著者 戸部けいこ 出版社 秋田書店

サポートブックのホームページ

<http://www.niji.or.jp/home/xiccztpage18/page.html>

☆ お父さんも協力してくれて、いっしょに子どもについて考え直した。

☆ 理解してもらえるのかどうか考えながら書いた。



何が良かったか。まず一番めは、私自身観察力がついて、娘を見る目が変わり、関わり方がうまくなった。なぜなら、わかっているようでわかっていなかった。見ているようで見ていなかった。感じ取っているようで感じ取ってやっていた。『すべて親の怠慢であった。』と言ってしまえば寂しすぎる。作るプロセスに一番の有益がありました。

二番めは、家族、施設指導員の方々に娘の様子、関わり方を簡潔に具体的に肯定的に伝えられるということ。皆さんは、よくわかると言ってきて何人かに貸し出しもしました。

三番めは、娘のことがよく見えてくると、何気なく過ごす時間も今までとは違い、日常茶飯事に課題を組み込ませている私がいて、それをさりとなさしている娘がいることがうれしいです。以前より、何気なく経験する機会が多くなりました。それぞれの家庭で結果は違うであろうけれど、ためしに作ってみてはどうでしょうか。“サポートブック作り”を皆さんにお勧めします。

御前節子



御前さんのサポートブックの一部を掲載させていただきました。

パニックや困ったときの対処の仕方

- ☐ 言葉かずに更に少なくして下さい。
- ☐ 飲み物を（夏・冬問わず、冷たいジュースが好きです）よろしくお願いします。
- ☐ トイレの場所を教えてください。そして、促してください。
- ☐ 何を言われているのか わからない時は、不安でしんどくなります。

ジェスチャーや写真・絵などで する 事や行き先を具体的にゆっくり伝えて下さい。そして「OK」と確認をとって下さい
OKがでるまで繰り返しよろしくお願いします。
☐ どう伝えていいのかわからない時は狭い所や移動しないバスや車の座席で一人で待たせてください。かなりの時間じっとしていられます。

コミュニケーションの取り方

- ☐ 最重度 自閉症
生まれつき脳の中樞神経の発達障害
- ☐ 言葉はありませんので、答えられませんが、ジェスチャーやゆっくりと具体的・肯定的なことを話してもらうと理解できます。
「○○を○○してください。」
（外国人に話すように）
- ☐ 字は読めないの、絵や写真・実物を見せてください。
- ☐ 時間が理解できないので、時計の針の絵で ○→○ まで待つ事を伝えて下さい。
- ☐ 大きな声や怒り口調の言い方は、自分に言われていなくてもイライラするようで苦手です。やわらかい雰囲気でご話しかけてください。
- ☐ 優しい雰囲気のお姉さんは大好きです。
- ☐ 体に触れられることはあまり好きではありません。
- ☐ 言葉は出来るだけ少なくして下さい。



私も、去年、息子(当時、高等部3年)が現場実習に行くときに作って持たせました。本人は、初めての場所での不安がとても強いタイプ。緊張のあまり普段以上にキッカケな行動や言葉を繰り返してしまいがちです。本当の気持ちをなかなか伝えられないもどかしさ、情けなさ・・・周囲の対応によっては、ますます緊張が高まりガチガチになってしまいます。それで、冊子では、場にそぐわない行動や言葉の意味を伝えることに重点をおきました。

作成にあたって、一つ試みたことがあります。“本人と一緒に考える”ということです。たとえば、「人が挨拶してくれているのに、突然関係ないこと言い出す

時ってどんな気持ち？」というように。普段はそういう侵入的な質問には絶対に答えてくれないのですが、実習への不安からサポートブックの必要性を誰よりも感じていた本人は、「う～ん、なんですか？なんか緊張して逃げてしまうんよ。」などと、自分なりに考えて答えてくれました。

本人にとっても、自分を理解する機会になったと思うし、実習時はもちろん、その後も自分の気持ちを伝えたいとき、いろんな場所で自分から手渡したりするなど活用しています。気持ちを代弁してくれるアイテムを持つことで不安を軽減できるということが大きいようです。

植野比呂美

平岡一美先生をかこんで勉強会

2003. 1. 27

平岡一美先生：和歌山大学附属養護学校教諭

「家庭での具体的ななかかわり方について」―保護者とともに考える―

会員17名、会員外2名の参加で、サブタイトル通り、先生自らいすなど円形に並べ替えてくださり始めました。

主に子どもがまだ小さい方々の質問で、トイレの自立、衣服の問題などの質問を笑顔で聞いてくださり、その時の子どもはこういう風に思っているかもしれない、こういう風にしてみたら、とみんなで話し合えるように進め、将来のことは見据えた上での年齢にあった支援のポイントを話してくださいました。

「なんと言っても子どもは可愛いもの」と最後に言うておられました。私の子どもも大変な思春期を、平岡先生はじめ和附養の先生方とひとつひとつ乗り越えられました。やさしく、またダメなことは一歩も引かず厳しく、人とのなかかわりを教えてくださっています。先生は、4月から現場復帰されましたが、「またこういう勉強会があれば自分も勉強になるので、機会があれば」と言うてくださっていましたよ。

津田弘美

つながり文化祭バザー

2003. 3. 2 県立体育館にて

バザー担当の皆さん、今年もごくろうさまでした！



料理教室

2003. 3. 5 関電ビルにて

炊き込みごはん、かきあげ、ほうれん草のおひたし
みんなでワイワイ、楽しいひととき♪



絵画教室でのとりくみ



こんな活動もやってるよ！

田辺絵画教室の田辺恭子先生が、自閉症の子どもたち（特に幼児、学童期の）のための親子教室に取り組んでくださっています。

子どもと絵

田辺恭子

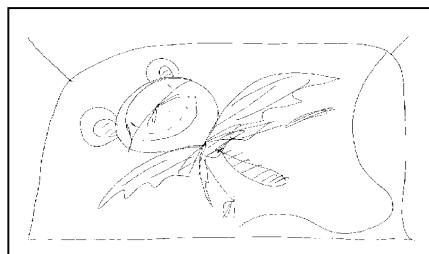
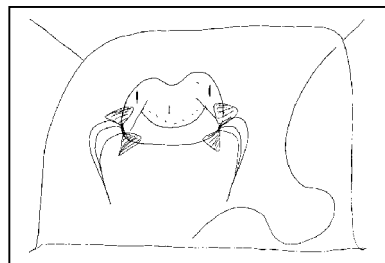
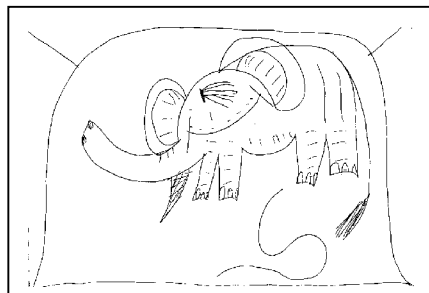
子どもたちと絵を描き始めて、早いものでもう17年を迎えました。その時その時で、子どもたちは変わり、私も教えられることがいっぱいありました。この間に、自閉症の子どもさんとも出会え、輪が広がりました。幼稚園に勤めているときに、何人かの子どもと接していたので、「私でも何かできるかな」と思い、始めることにしました。

人間って、絵に自分の姿を表現するものだと考えています。大人でも子どもでも、じっくりと一枚の画用紙に向かって、色と色を混ぜ合わせ、自分だけの色を作ってみませんか？いつもと違う絵が描けますよ。

最近、縁あって、自閉症児の子どもとお母さんの教室を開いています。親子で色を混ぜ、手や顔に絵の具をつけながらやっています。色の不思議さ、描くことの楽しさが、少しでも体感できればいいな、と思っています。

子どもの持っているステキな力を、少しでも自分らしく表現できるように、いろいろなことにチャレンジしていきたいです。

田辺絵画教室の生徒歴8年の辻野えりちゃんの絵です。



ただいま
生徒募集中！

興味ある方は、
事務局（辻野）まで！

実は、うちの息子も小学校の6年間、田辺先生にお世話になりました。いろんな素材を使っていろんな絵を描いて……。20才になった今でも、絵を描くことは大好きです。

植野

岡先生のワンポイントアドバイス③

「和歌山県にも自閉症センターの設置を願う」

附属養護学校 岡 潔

今回は、アドバイスというより提言をさせていただきます。

厚生労働省は、自閉症を中心とする発達障害児・者支援の新規中核事業として、自閉症・発達障害支援センターを全国12カ所に設置することにしました。いよいよ自閉症の世界にも新時代が始まるという予感がしますよね。

私は、一人一人の子どもを中心としたネットワーク作りということをいつも提唱していますが、どれだけの専門家スタッフと手を取り合い、親の会や研修会などつながっていくことは個人（保護者の方など）の力量に問われる部分が大きいと感じています。まだまだ、県下には誰にも診断を告げられず、悩んでいても相談もできず困っている方が結構いるのではないのでしょうか。昨年秋に、附属養護の保護者に実施した休日の過ごし方調査の中で、生活を充実するためには地域社会の障害者理解が必要であると答えた方や、障害者が利用できる情報提供の必要性を感じられている方が80%もおられました。これは和歌山市内の現状でもあります。郡部の方はどうですか。

施設や医療機関、学校などへ単独でつながっているケースはあっても、各機関同士の横のつながりが弱いのも現状です。よく仲間内で口に出されるのは、どこがリーダーシップをとってコンサルテーションしていくかということです。そこで、和歌山にも自閉症センターがあれば地域支援の窓口となりセンター的な役割をになってもらえます。そして、家庭を中心とする地域と学校と福祉施設とが一貫して連携していくことで自閉症児・者の生涯を見据えた支援が可能になってくると思われます。具体的には、自閉症センターに相談すれば、適切な助言が得られたり、専門スタッフの



いる各機関を紹介してくれたり、各種の療育サービスなどについて情報提供してくれたりするでしょう。また、研究機関として専門研修をコーディネートしてくれ充実した研修を積めることも期待できますし、緊急時に一時保護してもらえるショートステイも利用できます。

これからの時代は、学校、医療、福祉、労働、行政など互いの専門性を尊重しながら連携していく時代だと思います。これらのネットワークがいち早く構成され、こつこつと下準備をされてきた施設などが全国に先駆けて昨年10月に自閉症センターと名乗りをあげ認定されたのだと思います。12カ所の委託先は、社会福祉法人がほとんどであり、全国的にも名の通った施設が多いのも納得のいくところです。これらに続けとばかりに準備されている県も多いと思います。和歌山県が全国的な流れに乗り遅れることなく、自閉症センターが近い将来設置されることを願います。しかし、無からは何も生まれません。自閉症協会、学校、医療機関、通園児童・成人施設、保健所、福祉事務所、教育委員会、子ども・障害者相談センター、和歌山大学、TEACH研究会、障害者職業センター、など和歌山に現存するパワーを集結する時がきているのではないのでしょうか。

自閉症は生涯にわたってサポートの必要な障害です。そのサポートが、個に応じて一貫性のある継続的なものであることを希望されるのは誰もです。理想ではなく、現実の課題として取り組んでいきたいと思っています。

紀北分会総会と役員改正

2003.6.9 ビッグ愛にて

今年の総会では、役員改正がおこなわれました。会長は、前期に引き続き、津田朋男氏。事務局長は、辻野知津さんが努めてくださることになりました。（その他、総会資料の方を参照してください。）新役員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。また、家業を抱えながら4年間事務局長を務めてくださった御前さんをはじめ、旧役員の皆様、本当にごくろうさまでした。

御前さんより、メッセージをいただいています。

4年間ありがとう！

本当に充実した有意義な2期4年間、重要ポストの事務局を担当させていただき、お陰様で多くの学びと楽しい仲間ができました。

現在会員90名、十年一昔とするならば、会員のニーズも幾層もあって当たり前。そして、会員増を考えると幼児、学童に目が向きます。今は、療育・社会資源の情報も彼らは積極的に求めているので、私は、若い人から随分多く学ぶことができました。

そして、各分野の活動も活発になり、それぞれのニーズが反映されてきているように思います。でも、どの活動も会員全員のニーズという訳にもいかなくお互い認め合って、共存する中で会全体が充実していくことを願います。

本当にありがとうございました。

平成15年5月6日

御前節子

小野次朗先生講演会



総会後の講演会は、和歌山大学教育学部教授の小野次朗先生による「広汎性発達障害に対する考え方」についてのお話でした。小野先生の講演とあって会場は100名を越える参加者。わかりやすく、また、ユーモアたっぷりのお話に、時間のたつのも忘れるほどでした。



事務局からの お知らせ

★10, 11, 12月には、講演会をはじめ、いくつかの行事を計画中です。
皆さん、参加してくださいね。

★また、連絡事項も多くなり、役員、班長さんにはご負担をかけますが、ご協力
よろしくお願いします。

《事務局》 辻野

編集後記： 今回のイコラ、発行がたいへん遅れ、申し訳ございませんでした。編集部一同、気持ちは焦りながらも、諸事情によりなかなか進まず……。でも、ひとつグッド・ニュース！ スタッフが一人増えました！ 今後ともがんばりますので、スタッフ一同よろしくお願いいたします。

編集スタッフ：津田弘美 藤原昌子 辻野知津 佐々木峰子 植野比呂美

《発行》イコラ編集局（連絡先）植野比呂美